

復興ありがとうホストタウン一覧

2019年10月1日現在

自治体 (相手国等)	受けた支援の概要	取り組もうとする事業の概要
岩手県宮古市 (シンガポール)	・東日本大震災で被災した宮古運動公園陸上競技場の備品購入費用としてシンガポール赤十字社から支援金を頂いた。 ・宮古運動公園陸上競技場は、岩手県沿岸で唯一県大会規模の大会が可能な陸上競技場であったが、震災で全壊、2017年7月12日に再建が完成し、落成式が行われた。シンガポール赤十字社からの義援金により、競技用器具が備えられたことが宮古運動公園の復活に大きく貢献した。	・シンガポール陸上競技におけるオリンピック、パラリンピアンや小中学生を宮古運動公園陸上競技場に招待し、陸上競技交流大会等を開催。 ・招待した小中学生や関係者がたろう観光ホテルで実施している「学ぶ防災」に参加し、宮古市の防災の取組をシンガポールに発信することにより、シンガポールとの交流を促進。 ・シンガポールのオリンピック、パラリンピアンによる小中学校での講演・実技指導。
岩手県大船渡市 (米国)	・平成23年4月から7ヶ月間、ボストンの「オールハンズ・ボランティアズ」のメンバー延べ1,500人が大船渡市に滞在し、被災した民家の修復やがれき処理等に従事。メンバーは、地域の祭りやイベントなどにも積極的に参加して国際交流。 ・このほか、州立大学等から英語教育を含む心のケア、野球を中心とした中学生交流等の支援。	・「三陸大船渡夏祭り」や「盛町七夕祭り」、マラソン大会等に子供たちを招待。 ・米国から一流のトレーニング・コーチを招へいし、地元の中高生の陸上部員に、陸上競技のトレーニング・プログラムを実施。
岩手県花巻市 (米国、オーストリア)	【米国】 ・震災発生直後から、ホットスプリングス市及びラットランド市から多額の義援金や、励ましのメッセージをいただき、大きな支援を得た。小学2・3年生から、204通のメッセージカードが、市の宿泊施設に避難していた被災者に届いた。 【オーストリア】 ・友好都市のオーストリア共和国ベルンドルフ市から義援金をいただき、市長等から励ましのメッセージをいただいた。	・花巻市ハーフマラソン大会にホットスプリングス市の市民ランナーを招待。 ・姉妹・友好都市の市民・生徒等との相互交流を行い、日本文化、伝統ある祭りや民俗芸能等の郷土色豊かな交流を実施。 ・東京大会では両国が出場する競技会場に市民がかけつけて応援。
岩手県久慈市 (リトアニア)	・琥珀の生産地としての縁から姉妹都市となっているリトアニア共和国クライペダ市から震災後、多額の復興寄付金が届けられた。同寄付金は、被災者支援や復興工事等の財源に充てられた。 ・クレイペダ市内にある20以上の小中学校等で、子どもたちが折り鶴を飾り、震災で犠牲になった人々の鎮魂や復興を願う「千羽鶴キャンペーン」が行われた。 ・震災後には、クライペダ市から訪問団が来訪し、久慈市伝統の秋祭りに参加して、市民に元気を与えてくれた。	・リトアニア共和国クライペダ市を訪問し、同国主催のオリンピックデーにブースを出展し、同市との交流の歴史や、震災からの復旧・復興に取り組む久慈市の姿を発信する。 ・三船久蔵講道館十段生誕の地として、柔道の街を掲げており、柔道指導者も訪問し、柔道交流を深める。 ・リトアニア共和国のホストタウンである神奈川県平塚市と連携し、東京大会での同国の応援、大会前後の交流を進めていく。 ・琥珀、柔道を軸に交流を深め、復興する久慈市の姿を発信し、復興支援への感謝を伝える。
岩手県陸前高田市 (シンガポール)	・シンガポール赤十字社より、「陸前高田市コミュニティホール」の建設費用の支援。収容人数380名の最大のホールは、シンガポールへの感謝と友好関係に因んで「シンガポールホール」と名付けられ、2015年5月の利用開始以降、2017年9月までの利用者数は合計219,310名となっており、講演会やコンサートなど様々な用途で広く市民に有効活用されている。	・中高生が震災後の支援に対する感謝の気持ちを表すポスターなどを制作し、シンガポール関係者を招待し発表会を実施。 ・選手、家族等に歓迎・感謝の意を伝えるレセプション、震災からの復興状況を発信するツアー、高田松原再生のための記念植樹等を実施。

岩手県釜石市 (オーストラリア)	・震災当時、釜石シーウェイブスR F Cに所属し、後にラグビーオーストラリア代表となったスコット・ファーディー選手は、大使館からの避難勧奨を断り、釜石市のためにボランティアとしてチームメイトとともに救援物資の集積場で物資の積み降ろしや搬送作業に奔走していただいた。 ・国内の姉妹都市である愛知県東海市を通じて、中学生の海外体験学習事業として平成26年度からビクトリア州マセドンレンジズ市に釜石市の中学生を受け入れていただいている。	・スコット・ファーディー選手等オーストラリアのラグビー関係者を釜石に招き、ラグビーを通じて、市民や関係者との交流を図る。 ・中学生の海外体験学習事業を行っているマセドンレンジズ市の生徒を招き、感謝の気持ちを伝えと共に、市内で最も被害が大きかった鶴住居地区に整備する祈りのパーク等の見学を通じて、震災と復興の現状を伝える機会を設ける。
岩手県二戸市 (ガボン)	・東日本大震災後、ガボン共和国から100万ドルの義援金が日本赤十字社宛に贈られた。 ・震災時の二戸市の被害は、地すべりによる建物被害(2棟)など比較的軽微なものであったが、岩手県、宮城県、福島県の被災市町村から多くの方が避難され、二戸市において、避難生活をおくられた。 ・ガボン共和国からの義援金は、日本赤十字社を通じて、避難者の方を中心に家電支給などの生活支援に充てられ、暮らしに対する不安の軽減につながった。	・二戸市とガボン共和国の交流をもとに、被災地を代表して御礼を申し上げることとし、次の事項に取り組む。 ・ガボン大使館職員や日本在住ガボン人を招き、市の小中学校、高等学校の児童生徒がガボン共和国の文化について理解を深める特別授業や、児童生徒対象のイベントなどにおいて、文化にふれる機会を創出する。 ・市民向けに、ガボンの食や言語などの文化にふれる講座などを開催する。 ・大会直前には、市内小学生による応援メッセージボードなどを作成し、大使館を通じて感謝と応援を届ける。 ・大会中は市内でパブリックビューイングなどを開催し、応援する。 ・大会終了後は出場選手を招き、二戸市出身オリンピックとともに、伝統行事や農作物収穫体験など本市の文化にふれていただく交流会や、スポーツなどを通じた交流を展開する。 ・大会前から大会中、そして大会後の交流を通し、「復興ありがとうホストタウン」として、日本の復興を応援していただいたガボン共和国に感謝の思いを伝えつつ、末永い交流へと続けていく。
岩手県雫石町 (ドイツ)	・ドイツ連邦共和国のバートヴィンプフェン(BAD WIMPFEN)市及び隣接するネッカーズウルム(NEKARSULM、平成16年交流開始)市は、平成7年2月に雫石町国際交流協会と友好都市提携を締結。両市の交換留学で雫石町を訪問したドイツ人生徒や卒業生らが中心となって、東日本大震災発生直後、震災で大きな被害を受けた学校の子どものための教育支援をしたいという思いから、「学校が学校を救う」救援募金を立ち上げ、生徒たちが市民を巻き込んで募金活動を実施。これを、雫石町でドイツに交換留学した者で構成されるOB・OGの会「雫石・ドイツ翼の会」等が、山田町を含む岩手県沿岸部の4市町11校にドイツ学生の趣旨を伝えながら、その善意を届けたもの。 ・平成23年6月末に町国際交流協会に届けられた第一次義援金は、同年8月1日、山田町立山田中学校の生徒の学習及びクラブ活動に役立てほしいと、町国際交流協会会長から山田町教育委員会教育長に贈呈された。	・大使館員や元オリンピック等を招待し、大会機運醸成イベントを開催予定。 ・大会期間中、義援金活動の中心的役割を担った方々を中心に招待し、日本・雫石町の文化体験、被災地見学を実施する他、2020年東京大会においては町民がドイツチームを応援。 ・大会終了後、ドイツの大会参加選手等に雫石町を訪問してもらい、住民交流会、地元小中学生との交流会を実施。 ・交流事業を展開するにあたっては、義援金を受けた山田町と連携し実施することとし、ドイツに対し、いただいた支援への感謝と復興した姿を発信。
岩手県大槌町 (台湾)	・台湾の赤十字団体から災害公営住宅建設事業への補助をいただき、住宅の完成時などには同団体会長が来訪され、入居者を慰問していただいた。 ・また、同団体から、被災した私立保育園・私立幼稚園2カ所に対して、建設補助金をいただいた。 ・台湾佛教慈濟基金会から被災世帯に対して義捐金をいただいた。さらに、文化交流の面では台湾の音楽関係者の来訪いただき、コンサートを開催していただいた。 ・加えて、慈濟新芽奨学金制度を創設していただき、子供の進学を支援いただいている。	・令和元年度に災害公営住宅が完成することに伴う完成記念式典を開催し、台湾の赤十字団体等を招待し、支援に対する表彰を行う。 ・チャイニーズタイペイ選手が合宿を行う自治体を訪問し激励する。 ・大会開会中、現地での観戦やパブリックビューイングなどを開催し、町全体でチャイニーズタイペイ選手を応援する。 ・大会後は、卓球を中心として大会出場選手に訪問してもらい、町の復興した姿をみてもらうとともに、子どもたちと交流していただく。

岩手県山田町 (オランダ)	・山田町とオランダは、江戸時代にオランダ船が山田湾に漂着した縁で現在も交流が続いており、オランダ船が漂着した湾内にある島は、通称「オランダ島」と呼ばれている。 ・平成 26 年 5 月 24 日、東日本大震災で被災した山田町を支援するためオランダ関係企業・団体により結成された「一般社団法人オランダ島」から、山田町は、放課後児童クラブ「オランダ島ハウス」の寄贈を受けた。 ・現在、同クラブは、いまだ仮設住宅暮らしを余儀なくされている地域の子どもたちが、落ち着いて勉強ができ、また、帰宅後に存分に遊べる場として利用されている。	・オランダ島ハウス寄贈などの支援をしてくださった「一般社団法人オランダ島」の関係者の方々や、日本在住のオランダの子どもたち及びその家族を「オランダ島ハウス」に招待し、山田町の子どもたちがオランダの歴史文化について学習した成果を発表する。また、地域の文化・伝統を知ってもらえるような行事や復興状況が分かる語り部ツアーに招待する。 ・オランダのパラリンピアンなどに、町民 に対して、スポーツの楽しさや共生社会の実現に関する講演を行ってもらう。 ・東京大会の期間中、「オランダ島ハウス」で山田町の子どもたちがオランダ選手を応援する。 ・「一般社団法人オランダ島」関係者と連携し、町民有志による東京大会会場へのオランダ選手応援ツアーを実施する。
岩手県野田村 (台湾)	・東日本大震災に際し、台湾の台湾佛教慈濟基金会から全被災世帯へ義援金を頂いた。 ・大阪大淀ロータリークラブを通じ台北中正ロータリークラブから中学校に和太鼓 5 基の提供を受けるとともに、大阪中之島ロータリークラブを通じ台北福齡ロータリークラブから小学校へ楽器やスポーツ用具の支援を受けた。	・中学生代表が台湾ロータリークラブを訪問し、感謝を伝え、同クラブや台湾陸上選手へのインタビューを行い、その内容をポスター等で表現し、村民に報告。 ・ロータリークラブ、オリンピック、子どもたちに来訪してもらい、復旧復興した街並み、中学校の創作太鼓の演奏をみってもらう。
宮城県仙台市 (イタリア)	・平成 23 年 5 月、ペルージャ市よりサッカーチャリティイベントの収益金が寄贈された。また、同年 9 月、ベガルタ仙台ジュニアユース U-14 の少年達を AS ローマとのサッカー交流を通じて励ます遠征が受け入れられた。 ・東日本大震災で中断した仙台市博物館でのイタリア関連特別展の開催期間延長や出品等の支援があった。	・震災遺構の見学や震災情報の発信等を行う。 ・東京大会終了後、津波被害を受けた学校の生徒等との交流事業等を行う。 ・大会終了後、ヨーロッパ有数の地震国であるイタリアの政府関係者等を招き、防災環境の推進に関するシンポジウムを開催。
宮城県石巻市 (チュニジア)	・平成 4 年から始まった旧桃生町（ものうちょう）と東北大学チュニジア留学生の交流を契機に、在京チュニジア大使の訪問などを通して、親睦を深めてきた。 ・東日本大震災時には、在京チュニジア大使館が中心となり、被災直後の被災者へのチュニジア料理の炊き出しや、同大使館が関係団体に呼びかけて集めた生活物資の配布などを行った。 ・在京チュニジア大使館主催のチャリティコンサートや、大使公邸でのレセプションを通じて集まった収益金が石巻市の災害復旧や被災者への配分などに活用された。	・大会前：地元小中学生をはじめとする、市民のチュニジアに対する理解を深める講演会・講座の開催、チュニジアの元オリンピック選手を招いた子どもたちとのスポーツ教室等の開催、市内沿道にチュニジアの国花（ミモザ）等を植樹、等 ・大会期間中：市庁舎での横断幕の掲示や市民応援団による応援。 ・大会後：復興を成し遂げつつある石巻の姿を見てもらうため、チュニジアメダリストやアスリート、応援に来たチュニジア人を招いての祝賀レセプションや石巻体験ツアーを開催。石巻復興マラソンへの招待やチュニジア・石巻市周辺のスポート少年団の相互派遣交流を実施。
宮城県気仙沼市 (インドネシア)	・平成 23 年 6 月にインドネシアのユドヨノ大統領が気仙沼市を訪問し、仮設住宅にて被災者を激励したほか、東日本大震災からの災害復興資金として 200 万ドル（約 1 億 6 千万円）の寄付目録の贈呈を受けた。 ・寄付金は、地震の被害により使用できなくなった気仙沼図書館の建設費の一部として活用され、平成 30 年 3 月 31 日に開館、市民に広く利用されている。同館内の児童図書エリアの名称を「ユドヨノ友好こども館」と名付け、インドネシアからの震災復興支援の象徴としている。	・インドネシアの子ども達を招き、震災遺構の見学や本市の復興状況を発信。 ・震災以前から地元のインドネシアの方が参加パレードを行っている気仙沼みなとまつりに、インドネシアの大使や子どもたちを招待し、交流。 ・図書館利用者の笑顔の写真によるモザイクアートを作成し、インドネシア大使館へ贈り支援に対する感謝を表す。 ・インドネシアからの技能実習生と市民との交流事業を実施。 ・インバウンドの対象国として観光、旅行関係者の招待とモニターツアーの実施。 ・大会期間中、市内の小中学生を対象にインドネシア選手団の応援ツアーを実施。 ・大会終了後、インドネシア選手団を招き、住民との交流会等を開催する。

宮城県名取市 (カナダ)	・カナダ連邦政府、ブリティッシュ・コロンビア州政府、カナダの木材団体（カナダウッド）から、地震の被害で使用できなくなった旧市図書館敷地や、津波により壊滅的な被害を受けた閑上地区に、「カナダ東北復興プロジェクト」として、カナダの木材を使用した施設である「どんぐりアンみんなの図書室」及び「メイプル館」（朝市施設）の建設・寄贈を受けた。 ・震災以降、両施設は復興支援のシンボルとして市民や利用者に幅広く利用されている。 ・ブリティッシュ・コロンビア州スーク市、ジャーニー・ミドルスクールと、平成12年から市の中学生海外派遣事業を実施しており、被災地となった震災以降も、引き続き子供同士の相互交流を行っている	・これまでの支援に対する感謝の意を伝えるために、カナダの選手団や支援いただいた関係者を招待し、被災地の復興状況及び支援により整備された施設を紹介する。また、市民による感謝の集いを開催し郷土芸能や子ども達の発表を行う。 ・小中学校の児童・生徒や、中学生海外派遣でカナダを訪問したOB・OGを中心に、サイクルスポーツセンターを利用し、自転車を通じた交流を実施。 ・東京大会期間中は市民応援団を結成し大会会場でカナダ選手団の応援を行う。
宮城県岩沼市 (南アフリカ)	・南アフリカの救助隊（NGO「Rescue South Africa (RSA)」）が、2011年3月19日、岩沼市の仙台空港周辺において救助活動を実施した。 ・同月24日に、救助隊の一部が避難所となっていた岩沼市の市民会館を訪問し、市長にメッセージ入りのサッカーボールが贈呈された。 ・2011年10月には、(公財)プラン・ジャパン（当時。現（公財）プラン・インターナショナル・ジャパン）主催の「みんなで笑顔！プロジェクト」の中で、南アフリカ共和国出身の太鼓奏者が岩沼市の岩沼南小学校を訪問し、小学生と一緒にジェンベ（アフリカの太鼓）の演奏を行うなど、子どもたちの心を癒してくれた。また、2012年2月、3月にも、里の杜東仮設住宅で演奏をしてくれた。 ・2012年3月11日にはベコ駐日特命全権大使（当時）に岩沼市主催の追悼式にて、激励のメッセージをいただいた。 ・2014年11月、RSAの代表2名が岩沼市を訪問し、市長と面談し、記念の盾（Commemorating the relationship between Rescue South Africa and Iwanuma City）が贈呈された。	・例年8月に行われる岩沼市民夏祭りや岩沼市の復興のシンボル「千年希望の丘」周辺で開催されている東北・みやぎ復興マラソン（国際陸連認証コース・日本陸連公認コース）に南アフリカ共和国出身の太鼓奏者を招き、大会ステージで、ジェンベ（アフリカの太鼓）の演奏を通し、被災地・被災者と支援者同士の交流を行う。 ・RSAの関係者の来日時、岩沼市へ招き、復興状況を見てもらい、被災者との交流を行う。 ・在日南アフリカ共和国大使に3月11日に行われる東日本大震災岩沼市追悼式に出席してもらう。 ・南アフリカ共和国の陸上選手に、東北・みやぎ復興マラソンに参加してもらう。 ・2020年東京大会終了後、南アフリカ共和国の選手（陸上、バドミントン、柔道、卓球等）に岩沼市を訪問してもらい、市内競技者や子どもたちと交流してもらう。
宮城県東松島市 (デンマーク)	・平成23年3月30日、メルビン駐日デンマーク大使が東松島市災害対策本部を訪問し、寄付金や子供たちのおもちゃ（レゴ）を寄付。 ・同年6月、フレデリック皇太子が行幸され、保育所、小学校、避難所等を回られた。同国寄付金を原資に「デンマーク友好子ども基金」が創設、デンマーク女王陛下や多くのデンマーク企業から寄付。	・東松島夏まつりに招待し、市民と交流。おもちゃをもらった子どもたちとの交流や、プール・遊具を整備してもらった小学校・保育所での交流 ・大会後デンマーク代表と市民のスポーツ交流及び講演会
宮城県亘理町 (イスラエル)	・イスラエル親善大使のセリア・ダンケルマン氏が代表をつとめるNP0法人セリアの会は、町の保育士（延べ100名）を対象に心に傷を負った子どもたちへの接し方についてのセミナー（講師：イスラエル人精神科医）を実施したほか、被災した町民を元気づけるためクロマグロの解体ショー・刺身の提供イベントを開催するなど、今日まで被災者支援を継続。 ・イスラエルの国際的復興支援団体とNP0法人セリアの会が協力し、町へ支援物資を届けたほか、被災者・児童・生徒を対象に、駐日イスラエル大使も参加のもと、絵や音楽を通し、心をほぐす芸術ワークショップを開催。	・イスラエルをはじめとする国内外の寄附をもとにNP0法人セリアの会が亘理町に建設予定の「メノラー国際リーダーシップセンター」等を活用し、イスラエル大使館員やイスラエル人精神科医等、被災の際にお世話になった方々を招待し、復興状況の発信や交流会を行う。 ・2020年東京大会までの間に、町内小中学校生を対象に、駐日イスラエル大使館員によるイスラエルに関する特別授業を実施。

宮城県加美町 (チリ)	・加美町は東日本大震災で被災した南三陸町を始めとする沿岸部の住民 300 人弱を受け入れるとともに、加美町の職員 1 名を平成 24 年 4 月から平成 29 年 3 月まで 5 年間南三陸町に派遣し、復興の支援を実施した。 ・その間、両町民の交流が促進され、今でも南三陸町へ戻った方と支援した方の交流が継続している。 ・一方、南三陸町は、1960 年のチリ地震以来、チリ共和国と友好関係を結んでいる。1991 年には絆の証として南三陸町がチリ人の彫刻家に依頼して創ったモアイ像が志津川地区の松原公園に設置された。しかし、東日本大震災によりモアイ像が流失。このことを知った日智経済委員会チリ国内委員会が新たなモアイ像を南三陸町に送ることを検討し、2013 年 5 月にイースター島で作られたモアイ像が南三陸町に贈呈された。 ・こうした南三陸町に対するチリからの支援への感謝を表す取組を、震災時から南三陸町との交流を続ける加美町が主体となって実施することとする。	南三陸町との交流も含め加美町として以下の事業の実施を目指す。 ・チリのパラ選手と障がい者が、パラカヌー等を通じて交流。それをきっかけとして毎年 10 月に開催される「Sea to Summit」にチリの方々も参加いただくよう働きかける。また、大会時のチリのパラカヌー選手の事前合宿を受け入れる。さらに、チリの選手が学校を訪問し、スポーツ交流や出前授業を実施してもらう。 ・パッハホールで開催されるイベントにチリ選手を招待する。また、チリ国民とともに、同ホールを活用したイベントを計画する。また、加美町食の文化祭に、チリの食材や伝統料理の提供を企画する。 ・大会への応援団の派遣や町内にパブリックビューイングを設置するなど、チリ選手が好成績を収められるよう町ぐるみで応援体制を作り上げる。 ・大会終了後、本町及び南三陸町を訪問してもらい、町民との交流や南三陸町に設置されたモアイ像をご覧いただく。
福島県喜多方市 (米国)	・昭和 63 年に、アメリカ合衆国オレゴン州ウィルソンビル市と姉妹都市となって以降、中高生の研修使節団の受入と派遣を隔年で実施し、市民レベルでの交流を重ねてきた。 ・平成 23 年の東日本大震災及び原子力発電所の事故に際し、姉妹都市交流に参加したウィルソンビル市のホストファミリーから喜多方市の元研修生に励ましのメッセージが寄せられる等激励を受けた。同年 11 月には、ウィルソンビル市姉妹都市協会と会津喜多方国際交流協会を通じて、ウィルソンビル市民等からの激励のメッセージと寄付を受けた。 ・メッセージは避難所に掲示して紹介され、多くの避難者や市民が勇気づけられ、復興への励みとなった。	・ウィルソンビル市の中高生等を招き、スポーツや食、文化などの体験交流を通じて、福島県及び本市の復興状況を発信していく。 ・相手国のポート協会や体操協会などの競技団体やスポーツ団体の関係者を招き、本市の体育施設等の視察や、食、文化などのおもてなしを通じて、大会後のスポーツ交流事業の実施を働きかける。
福島県二本松市 (クウェート)	・東日本大震災により、本市は、震度 6 弱を記録し、6900 戸を超える家屋が被害を受けるとともに、東京電力福島第一原子力発電所事故で、放射性物質により農畜産物の出荷が制限されるなど様々な影響を受けた。 ・このような中、クウェート国から日本に対し、原油 500 万バレル（日本円にして 400 億円相当）の無償提供の申し出があり、日本赤十字社を介して、その代金相当額を支援いただき、そのうち、約 155 億円を福島県に充てていただいた。 ・救援金は、被災した中小企業に対する支援、サテライト校の生徒に対する支援、県外避難者への情報誌発行等の事業に活用されている。 ・二本松市の市民も、このようなクウェート国からの支援のおかげで、長引く避難生活を乗り切ることができ、帰還した市民の生活再建に役立てることができた。	・大会前には、本市の市民とクウェートの国民が互いに理解を深められるよう、当市とクウェート国との間で交流を行っていく予定。今後、NOC・NPC に加え、同国の文化庁や在日大使館と連携しながら交流を図っていく。 ・大会直前には、市内中学生・高校生などによる応援メッセージボードなどの作成や、同国オリンピック・パラリンピアン事前合宿を受け入れる（クレ射撃等）。 ・この際、選手等を市内の小・中学校へ招いて、子どもたちとの交流の機会を設け、子どもたちに国際社会との関わりを持ってもらうとともに、本市の伝統文化に触れる機会を設け、本市を PR する。 ・大会中は市内でパブリックビューイングなどを開催し、応援する。 ・大会終了後は、二本松の菊人形の会場にクウェート国のブースを設け、歴史・観光スポットの紹介や、伝統衣装を展示することで、来場者にクウェート国の文化を伝える。

福島県南相馬市 (ジブチ、台湾、米 国、韓国)	【ジブチ】 ・ジブチ共和国イスマイル・オマール・ゲイ大統領が、「TIME 誌」により市長のことを知り寄付を希望。平成 24 年 4 月にアホメド・アライタ・アリ駐日ジブチ共和国大使館特命全権大使が来市し、市長に対し大統領及び国民からのお見舞いの言葉及び義援金を寄付。 【台湾】 ・平成 23 年 11 月、台湾三重北區扶輪社等から給食用運搬車両 1 台の寄付。台北市当局より「原発事故の影響で屋外での運動ができない南相馬の子どもたちを招待したい」との話をいただき、同年 12 月に台北市内で開催された「中学生野球交流大会」に本市中学生が招待。 このほか、米国や韓国からの支援を受けた。	・相馬野馬追祭、マラソン大会に招待するほか、約 30 施設ある市内のスポーツ施設で、地元のこどもたちのスポーツ交流を実施。伝統ある市の文化民俗（祭・食）等を体験する交流を実施。 ・ジブチ共和国とは陸上・空手道競技の指導者・こどもたち同士の交流を実施。台湾とは野球競技の指導者・子どもたちを招待し交流。米国とはサーフィン競技、韓国とは柔道競技に関して交流を実施。 ・東京大会に参加する各国選手団の頑張りを会場で応援し、併せて市にお招きして歓迎・慰労等の会を開催。
福島県伊達市 (ガイアナ共和国)	・東日本大震災後、ガイアナ共和国から多額の義援金が日本赤十字社宛に贈られた。 ・伊達市は、東日本大震災により、最大震度 6 弱を観測し、約 300 棟の家屋が被害を受けるとともに、東京電力福島第一原子力発電所事故の影響により、市民の避難や農産物の出荷制限など様々な影響を受けた。 ・日本赤十字社に寄せられた救援金を基に、避難した市民に対して生活家電が提供され、こうした支援のおかげで市民の生活再建ができ、震災前の姿を取り戻すことができた。	・大会前には、ガイアナ共和国の選手団団長などを当市のイベント「だてな太鼓まつり」に招待し、当市の伝統的な文化を紹介する。 ・大会期間中は、選手に対して応援メッセージを届けるとともに、ガイアナ共和国の大会出場に際しパブリックビューイングを実施し、ガイアナ共和国の選手を応援する。 ・大会前後に日本人オリンピックを招き、市民に対する講演や競技体験を行い、市民のスポーツやオリンピックへの関心を高める。 ・大会終了後に選手及び大会関係者を当市に招き、地元の食や伝統文化などを体験していただくとともに、スポーツを通じた交流を展開する。 ・ガイアナ共和国との交流を通し、「復興ありがとうホストタウン」として、復興を応援していただいた感謝の思いを伝えつつ、これを機に末永い新たな交流が進むことを目指す。
福島県本宮市 (英国)	・平成 24 年 7 月、ロンドン中心部に「福島庭園」を整備。 ・市では、子どもが安心して遊べる場所を確保するため平成 26 年 12 月に「スマイルキッズパーク(愛称：プリンス・ウィリアムズ・パーク)」を整備。同所を平成 27 年 2 月ケンブリッジ公ウィリアム王子が訪問され、記念植樹をされるとともに子どもたちを慰労。 ・平成 29 年 7 月、本市のプリンス・ウィリアムズ・パーク「英国庭園(同年 11 月開園)」とロンドンの「福島庭園」が姉妹庭園協定を締結。	・子どもたちが英国を訪問し、同市の食、生産物、暮らしの状況を伝え、交流を深める。 ・英国の子どもたち来てもらい、「プリンス・ウィリアムズ・パーク」等訪問、収穫祭体験など交流を行うとともに、テレビ電話などで学校単位による相互交信を実施。 ・出場選手等に、応援団として郷土食や本市の日本酒・お菓子等の特産品を届ける。
福島県北塩原村 (台湾)	・震災の被害を知った台湾舞踊家協会が、平成 23 年 6 月村に避難している被災者を激励するため、村内 4 ヶ所で慈善公演を開催。 ・中学生台湾派遣交流事業を平成 24 年より実施しており、村の中学生が毎年、台湾を訪問し、現地の中学生と交流を実施。 ・平成 26 年 8 月、台湾観光協会により台湾の伝統舞踊団「台湾傳鍊堂綜合芸術団」が当村を訪問し、台湾獅子舞や台湾龍神舞を披露している。	下記事業の実施を検討中 ・交流相手の中学生を招き、村の中学生と交流。 ・震災後にお世話になった舞踊団の皆様にも来村していただきたい。当時、慰問を受けた避難者の方も招いて、交流会などを実施。 ・村で盛んなバドミントン、卓球競技の台湾代表選手を、大会終了後に村に招き、交流会等を実施。

福島県楢葉町・広野町・川俣町 (アルゼンチン)	・東日本大震災による地震及び津波により、大規模な損害が発生。同時に発災した福島第一原子力発電所の事故により、楢葉町・広野町では全町民が避難を余儀なくされるとともに、当地域の中心施設である「Jヴィレッジ」も事故収束の拠点として使用された。川俣町においても、一時は居住制限区域及び避難指示解除準備区域が設定され一部町民が避難を余儀なくされた。 ・アルゼンチン共和国からは、同国赤十字社を通じて多額の義援金が寄せられ、こうした支援のおかげで長引く避難生活を乗り切ることができ、帰還した町民の生活再建に役立てることができた。 ・サッカーアルゼンチン代表で、世界的に著名なメッシ選手が、親元を離れて東京などに避難する福島の子どもたちに、サイン入りユニホームをプレゼントしたり、記念撮影を行ってくれ、子どもたちを元気づけてくれた。 ・川俣町では、アルゼンチン共和国コルドバ州コスキン市で行われる世界最大規模のフォルクローレ音楽祭にちなんだ音楽祭が同町内で 1975 年から開催されており、2013 年にコスキン市の小学生から励ましの絵画 106 点をいただいた。	・アルゼンチン共和国の選手団、大使、同国関係者等に復興した姿を見ていただく。 ・福島第一原子力発電所の事故から得た教訓を映像等を見てもらうことにより、しっかりと国際社会へ発信する。 ・選手に対し、地域住民の方々による呈茶や着物の着付け、地域の特産品を使った日本ならではの食事などを提供し、住民と食を通じた交流を図る。 ・選手と地元の子どもたちとの交流や相互の伝統文化、音楽交流（和太鼓やフォルクローレ）などを通じ、これまでの支援へ感謝の気持ちを伝え、継続した交流へ発展させていく。 ・地元の子どもたちが異文化に触れ、障がい者との関わりにより多様性を身につける機会とするため、Jヴィレッジを拠点として、アルゼンチンブラインドサッカーチームとの交流を目指す。 ・東京大会時には、サッカーアルゼンチン代表にJヴィレッジを訪問してもらい、住民との交流を行い、復興のシンボルとしてJヴィレッジを発信する。
福島県飯舘村 (ラオス)	・ラオスとは、「学校を作るお手伝いをしよう」と子供たちが募金活動を開始し、村もふるさと納税を開始。平成 23 年 2 月には職員がラオス・ドンニャイ村を訪問、絵本を現地の学校に寄贈した。 ・震災後は、ドンニャイ村民が飯舘村のために祈りをささげた。同村中学校、同校長より激励の手紙が送られた。小中学生から激励メッセージ入りのこいのぼりが届けられるなど交流が継続。	・ラオスの子どもたちや在京ラオス大使館の方々を学校行事や村のイベントに招待。 ・飯舘村では震災前より、福島県で行われる市町村対抗福島駅伝に毎年参加しており、陸上に関する講演、指導等の交流を実施。